

# 令和3年度 第1回 国産材の安定供給体制の構築に向けた 東北地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日時：令和3年5月28日（木）10:00～12:00
- 2 場所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概要

## （1）冒頭挨拶

### ○ノースジャパン素材流通協同組合 鈴木 理事長（東北地区需給情報連絡協議会事務局）

本日は、ウェブで参加いただき感謝。

木材需給に関して、昨年度はコロナ禍の中で需要が落ち込み、工場が減産、原木が余剰になるという状況があったが、ここにきて全く逆の現象が起きていて、外材の輸入量減少や高騰により国産材へ代替する動きが大きくなっている。

本協議会を5月末に開催したのは、この緊急の事態を踏まえて、国産材への代替をどうやって、今行うのか議論するのが目的と考えている。

川下では木材がどれくらい足りないのか、国産材への代替の要望がどのくらい強いのか。

川中では、木材加工工場の増産には何がネックなのか、従業員の確保の問題か、丸太の確保か、輸入材の代替で国産材に要求される品質の要求が高すぎるのか。

川上では、去年丸太の需要が急激に落ちたのに、急に増やせといわれても何がネックになるのか、また、色々な樹種があるので何を選択しなければならないのか。東北が九州と違うのは、樹種が多様なことと、国有林の比率が高いということであり、国有林の供給体制、併せて、再生林に一生懸命取り組んでいる最中なので、森林整備と生産のどうバランスさせるのかなどのいろいろな課題がある。

今回、川上から川下までの関係者が集まっている中で率直な意見交換をいただき、何らかの対応策を見い出せれば協議会開催の意義があると思う。

## （2）議事

### ○秋田県立大学 木材高度加工研究所 高田 所長（以下、座長）

初めて座長として皆さんにお会いする。

議事に入る前に、新たな参加者について紹介する。プレカット業界から久慈プレカット事業協同組合の日當（ひなた）様に新たに構成員となっていたいただいたほか、オブザーバーとして全建総連北海道・東北地方協議会の櫻井様にもご参加をいただいていることを報告する。

それでは議事に移る。今般、輸入材の供給不安ということで、木材の不足、価格の高騰など、特に川下側に大きな混乱が起こっており、これが協議会の共通認識と考えている。本協議会では、現状についてまずは林野庁から説明をいただき、その上で意見交換を進めていく。

### ○林野庁木材産業課 高木 課長補佐

資料1～3について説明。

### ○高田 座長

今の説明を簡単に2点ほどまとめると、まず、今般の輸入材不足の一つの大きな要因は米国の住宅着工数であること。資料にあったのは戸建てのみだと思うが、集合住宅もいれると1.5倍くらいの数になるのではないかと思うが、すごい数の住宅着工が進んでいる。

また、自分でも調べたが、米国では、フレーミングランバー（建築用材）だけでなく、低い

グレードの木材やOSB等のボード類も含めて、全て価格が上がっている。では現地の製材業界がどう対応しているかということ、2021年度に90万㎡の増産をするような資本投資、つまり増設が行われている。また本年度以降から2024年まで、既に計画を立てて動き出すところ、まだ計画だけのところも含めて、500万㎡の新たな生産施設への投資が行われるだろうと言われている。

この背景としては、今800万㎡の需要があるが、それに対して550万㎡しか米国内で供給できていない実態を踏まえ、カナダ材の供給は虫害処理が一段落したために増えないだろうか、国際的な事情を踏まえて、国内での施設整備への投資が進んでいると聞いている。

日本国内のスギの需給を考える時、米国の住宅着工数が一つの大きな問題であるのであれば、現地の製材企業がどんな動きをしているのか把握するのも重要なので紹介させていただいた。

また、もう一点については、国内では、製材品の生産量は伸びていて価格も上昇しているが、ただ輸入材の不足分を埋めることができていない状況ということ。

では、意見交換に入る前に、まず川下の建築事業者の現場の状況について、実際何がどのくらい足りないのか、何が起きているのかなど、教えていただきたい。

#### ○(一社) J B N ・ 全国工務店協会 加藤 理事

省エネ・高気密・高断熱住宅が多く建てているので、集成材を多く使っている。ただ、スパンが大きくなると、国産材ではなく米マツのような集成材でないと構造計算上強度が足りなくなるのだが、現在不足しており、それに代替するものがなくて困っている。

国産材については、県産材を以前から使ってきており、あまり影響がない。

住宅着工は、最近は集中してきている状況。

#### ○高田 座長

横架材が足りないということだと思うが、米マツだけでなくレッドウッドも含めた話なのか？

#### ○(一社) J B N ・ 全国工務店協会 加藤 理事

そのとおり。

#### ○高田 座長

国産材のスギで代替するとすれば、梁成を増やすなど断面を変えるしかないという理解でよいか？

#### ○(一社) J B N ・ 全国工務店協会 加藤 理事

そのとおり。それにより材料費も上昇していく。

#### ○(一社) 日本木造住宅産業協会 東北支部 萩原 事務局長

住宅については、報道されているとおり、輸入材、国産材とも値上がりが顕著で、早急に住宅価格に転嫁していかなければいけない状況。

着工戸数は、コロナ後需要が回復しているとはいえ、首都圏がメインで、東北エリアでは木造住宅の着工が急激に増えている状況ではないというのが肌感覚。

#### ○久慈プレカット事業協同組合 日當 専務理事

プレカット事業では、色々な求めに応じ、各資材を一体として提供することを求められている。

J B Nからも話があったが、横架材の確保がかなり不安定になっている。いろんな提案をして設計変更等を行い、最近では4 m以下だと無垢材で対応することも増えてきた。やはりプレカットの中では5 m、6 mの梁の設計もあるので、それらは外材が揃わなければ、場合に

よっては梁組みを変更して4mでおさめるなど、工夫している事例が最近増えてきた。

併せて、国産材でまだ何とかかろうじて手当てできているが、垂木や根太なども、だんだん厳しさの度合いが増してきたと感じている。

#### ○高田 座長

基本的には横架材、また垂木、根太なども少し不安になってきているということ。野地板なども合板で代替していると聞いたことがある。製材にとって何回も鋸を入れて野地板をとるのはメリットがないので、なかなか増産してもらえず、代替品を探しているという状況だと思う。

建築、プレカットから話を聞いたところだが、特に横架材について、川中、川上、流通から、対応できているのか、ほかに足りないものもあるのかなど、状況をお聞きしたい。

#### ○物林(株) 国産材事業推進部 国産材営業室 関口 氏

当社の盛岡事務所は原木の取り扱いがメインだが、関東では、ビルダーに対して輸入材だけでなく国産材製品の提供や提案をやっている。その話を聞くと、やはり横架材の不足がかなり顕著なので、代替として国産材、またはハイブリッドを提案して切り替えていくという事例もある。単価の課題もあるが、提案により切り替えができたところもあれば、できないところも当然ある。ただ、一時的なブームに過ぎないように国産材を継続して使っていただけのような提案を心掛けている。

#### ○高田 座長

ご指摘のとおり、一時的に代替材として国産材を出すのではなく、今後も使ってもらえるような取組も大事だと感じる。

今、川下や流通から話があったが、ノースジャパンではどう見ているか。

#### ○ノースジャパン素材流通協同組合 営業企画部 小野寺 部長

山側では、昨年の秋口から素材生産量を伸ばしている。現状の引き合いは例年と違う。特に一般材について、製材所の引き合いが異常なくらい多い状況。

山側は、できるだけ増産の状況に応えるように取り組んでいるところだが、昨年のコロナの影響で一部の出荷者は高齢のため廃業したことなどもあり、多少ではあるが生産者の出荷量の減少がみられるところ。今は組合員に生産に協力していただき、増産に努めている。

#### ○(株)山形城南木材市場 安部 代表取締役社長

山形県の情報ではあるが、製品市場としては、宮城の大手のプレカット工場や、集成材アカマツやホワイトウッドを使用するプレカット工場の客が、去年から加工を断られている状況で、当市場併設のプレカット工場にも見積もり依頼が増えてきている。

4月、5月は材が確保できなくて加工が進まず、前年より落ち込んでいるが、6月は遅れている4～5月の分と、相場が上がるということで7、8月まで含めて受注が殺到していて、CADがパンク状態。ただ、材料が集まらない。本日も市日であるが、林場に製品が集まらず、半分も埋まっていない。毎回、せりも行っているが、これまでは㎡当たり平均5～6万円だったのが、今は8万円では買えず、商品によっては10万円までせりあがっている。客の方も、どうやって売するのか、価格転嫁は難しいのではないかと考えている。

梁材は中国木材からの供給があるので何とかなっているが、それでも足りてはおらず、市場の仕入れに当たっては国産材スギのメーカーにKDで5～7寸で、桁回りなど加重のかからない用途向けに生産してもらおうようお願いしているが、なかなか進んでいない。また、土台も足りなくなるだろうということで、スギの赤身で防腐注入したものの代替も考えている。

プレカット工場は、材が揃ったものから加工し始めているが、非住宅については注文が受けられない状況。

**○高田 座長**

木材不足の現在の状況や対応状況等についてお話を伺ったところだが、ここからは、協議会のもう一つの目的である、中長期的な国産材の安定供給安定調達の体制づくりに向けた議論を行いたい。

安定供給といっても、川下が買ってくれないと投資もできない。設備投資し増産体制を整え、それを川上に伝えて供給を増やしてもらい、安定供給していくということが一つの作戦。

議論の呼び水として、昨日開催された九州地区協議会で遠藤座長から提出された資料を共有したい。林野庁から説明をお願いします。

**○林野庁木材産業課 高木 課長補佐**

参考資料説明。

**○高田 座長**

遠藤座長からは、九州の事情も踏まえた上で、その資料を提出されたと思う。東北の事情は多少異なるだろうが、考えていくべき点はあるし、これまでの議論の中で出されたものと共通の問題があると考え。

目下の課題は、輸入材に対して我々がどういう形で国産材のシェアを伸ばしていくのか、あるいは今伸びたシェアをさらに伸ばしていくには何をすべきか、考えていきたい。

ここからは、休憩を挟んで、川中、川上と順番に意見聞いていきたい。

**<<休憩>>**

**○高田 座長**

それでは再開する。川中、川上に意見を聞きたい。

**○(株)ウツェィかわい 小野寺 常務取締役**

現状では、スギ集成材、カラマツ防腐土台をメインで製材している。横架材は、カラマツ中断面平角も一部出荷しているが、増産しようにも土台も同じ樹種を使うので簡単にはできない。

昨今の人手不足の問題も当社にとっては一番大きい。特にコロナの影響で、外国人技能実習生を数名入れていたが、帰国した後に補充できおらず、受注はもらうが増産できない状況。それが一番の課題で、土台、平角を両方増産するのが難しい。

日本の住宅における梁について、横架材はE105以上や、E120が欲しい、というニーズが大半で、今までレッドウッドや米マツが使われてきているが、国産材で代替するにはE95以下でも十分に構造計算が成り立つようにするなど、基準が変わっていけば、このような事態が発生してもある程度国産材でも対応できるようになると思う。

**○高田 座長**

横架材のグレードについて、E105やE120となると、スギを使おうとするなら、断面形状を変えないといけなくなる。設計側はどうしても安全側に立たざるを得ないこともある。E95を使用するならスパンを変更する必要も出てくる。この辺、設計側にも御理解いただいて、国産材を使うというサプライチェーンの中で、川下側の取組も必要になると感じる。

**○協和木材(株) 新庄工場 山林部 矢口 副部長**

新庄工場は集成材のみ生産している工場で、地元材を使用して生産している。現在、集成材の引き合いは非常に強く、国産材への代替が加速している状態。

原木の調達側からの意見を述べたい。原木は県内及び近隣県から調達している。立木購入もしているが、価格高騰もあり、入札では苦戦している

素材購入については、ノースジャパン素材流通協同組合、各県森連を中心に集材している。一時、コロナ禍により価格が下がったが、徐々に回復しているので、市況を見ながら確保している。

製品増産に向けた計画もあるので、それに向けた準備も進めている。

悩みとしては、山形県内で原木の輸出が活発になっていること。国産材をメインで扱っているので、海外に行く前にまずは国内の需要を満たしたうえで輸出に向けていただけると非常に助かる、というのが正直な意見。

#### ○高田 座長

山側も、皆伐が進むと色々な径級のもが出てくるので、それをどうやって使うのか、今まで以上に考えないといけなくなっている。輸出も出口の一つではある。加工してから輸出するのがいいのかもしれないが、原木で出している。

コロナ禍により欧州からの集成材ラミナが止まっていて、価格も400ユーロ以上になっている。止まっていたコンテナがそろそろ動き出すところ。ずいぶん前に買ったラミナに保管費用も上乘せされることになると思うが、ホワイトウッドラミナはこれまでよりは入ってくるようになるのではないかと聞いている。

次に、チップの状況はどうか。山側からの材料供給という意味では、A材、B材、C材という言い方がいいかどうか分からないが、チップも相当出てくると思う。

#### ○岩手県チップ協同組合 瀬川 理事長

昨年度、針葉樹は対前年比で80%、79,600絶乾トン、広葉樹は対前年比64%で109,000絶乾トンと、いまだかつてない低い数値に終わっている。

製紙会社の影響だが、どうしても人口減少、ICT化などで紙の消費量が年々減少し、10年間で30%減となった。昨年はコロナ禍の拡大で商業向けの需要が大きく減少し、ペーパーレス化が進んでいる。

原木は、平成24年度からFIT制度が始まり、国有林材は年々高騰。それ以前と比べると6~7倍の落札価格になっている。これは我々チップ業界では使えないレベル。そうすると民有林しかないが、山林業者が年々減っており、低質材の供給が減少。

これからチップ生産は、輸入材を減少して国産材を使用してもらいたいという状況。

#### ○高田 座長

人手が不足しているというのがどの業界も共通していると思う。効率化しつつも、増産するとなるとある程度必要な人数を確保しなければならない。解決策は難しいが、問題意識は共有できた。

川中について、国産材の集成材、製材工場は、フル稼働で要望を満たすように頑張っている状況だと思うが、中長期的にこのシェアを確実にすることが今後の課題になると思う。

次に、川上の素材生産状況はどうか。昨年はコロナ禍で需要が急に減って相当苦労されたことを踏まえ、今後、川下のニーズに応じて供給拡大するには、どのような条件があるのか、協定など川上側が仕組みとして求めるものがあれば、お聞きしたい。

#### ○秋田県素材生産流通協同組合 山田 理事長

昨年度はコロナ禍の影響で素材生産量は落ち込んだ。当組合としては、横持ちの土場を確保して対応した。去年の経験からお願いしたいのは、踏み込んだ情報共有をこれからも継続していただきたいということ。そうすれば、緊急的な木材の需給変動に対しても、先を少しでも見通した形で対応できると考える。

#### ○高田 座長

この協議会でも、全体のトレンドについての情報共有は大きな目的だと考えるが、昨年のころなかでの対応を踏まえて中長期的なことを考えると、当事者同士で、情報共有してビジ

ネスにつなげていくのが大事ではないか。

当地区は国有林の比率が高いということもあり、東北森林管理局から、材料供給の川上の立場から、また全体を見通した上で何かご提案いただけないか。

#### ○東北森林管理局 森林整備部 間島 部長

東北森林管理局が木材を供給するに当たり、何があってもとにかく売りさばくというのではなく、地域の状況をよく見て、昨年のように需要が下がった時には民有林材を押しよけのように注意し、また、現在の原木不足の対応としては、越材を全量委託販売として市場への早期の供給にまわす、あるいは安定供給システム販売も同時期の協定公募量は6～7万m<sup>3</sup>増やして提供する、昨年停止していた国造立木販売も再開し、5月は例年の約2倍を公売にかける、といった対応をしている。

こういった対応をするには、状況を正確に見極めることが必要で、いろんな情報を収集しながら対応している。個々の取引でいえば、相手を商売敵として捉えがちになるが、もう少し大所高所から、地域全体で取り組むべきことは何か、例えば本日議論しているような輸入材代替をどうしていくのか、先行きの見通しはどうかなど、重要な情報を隠すのではなく共有しながら取り組んでいくのが大事ではないかと考える。

ノースジャパン素材流通協同組合理事長から話があった、国有林の供給体制をどうするかという面では、ICTも活用して生産性を高めたり、一貫作業で造林も一体的に行うことができる強い事業体を育成すること等を通じて効率的に木材を供給できるように山側でも努力をしている。

山から木が出てこない川下のコストに跳ね返るということを山側でも認識しつつ、川上から川下までが一緒にスクラムを組んでやっていく体制になっていくことを期待している。

#### ○高田 座長

情報をどう共有するのか、10年前の新生産システムの時にも地域でどう情報共有して活用するのかということは大きな課題にはなっていたが、実際それが仕組みとしてできている地域は多くない。エリアをどこまで広げるのか、川の流れの前後のどこまで情報共有するのか、個別のことは色々あるが、大所高所から見れば自分たちのやっている仕事は地域にとっても、地球環境にとっても重要であるので、地域の人たちが生き残って仕事をしていくためにも情報共有のやり方を考えていただきたい。

今の状況をまとめると、国産材の需要を増やして、一部の部材については厳しいという指摘もあったし、原木、部材の供給も急には増えないという話もあったが、今までのところノースジャパン素材流通協同組合から意見、提案などあるか。

#### ○ノースジャパン素材流通協同組合 鈴木 理事長

柱材であれば、既に1/3が国産無垢KD材、1/3がスギ集成材、あと1/3がホワイトウッドという状況であり、頑張れば不足分を国産材でカバーできるのではないかと。土台もヒノキの比率等高まってきている。スギ赤身やアカマツ集成材土台等を増やせば、これも国産材で代替可能。

問題は、国産材比率が10%未満である横架材をどうするのかということ。ノースジャパンには、強度の関係でカラマツやアカマツの引き合いが強まっている。また、東北のスギの強度は九州よりも高く、Eの区分を適切に使い分ければ需給バランスがとれてくるのではないかと。

一番重要なのは、今何が足りないのか、何の樹種のどういう長さのものが必要なのか、注文を受けても山側はすぐ対応できないので、2～3か月前には、どのような樹種や長さのものが欲しいのかという川中、川下の情報を提供していただきたい

田舎は人がいない。求人広告を出しても誰も来ない。林業大学校も設立されているが、コロナ禍で雇用が不安定な会社から人を派遣してもらおうなど、林野庁でも何か支援を考えられないのか。このような取り組みがないと、大增産をかけるには厳しい状況。

とにか、人の問題と、情報を早く流す、というのが需給を安定させるポイントと認識。

#### ○高田 座長

リードタイムを十分確保する必要がある、そのためには情報の共有をしてほしいということだった。協定等を締結して、少なくとも突然入荷を止めたり増産を求めたりということは止めてほしいということだと思ふ。

人の問題は、林業だけでなく、日本全体の構造的な問題。一つの業界、川上、川中、川下のそれぞれだけでは解決できない問題。

#### ○(株)山大 高橋 管理部長

昨年度、コロナ禍に身構えた状態で、在庫について原木は1か月、仕掛品・半製品は2か月、完成品は1か月を目標として、その目標に達しようとした年末にウッドショックが起きた。年が明けて、原木2か月、半製品3か月、完成品は1か月を目標として1～4月は対応している。現在、原木については1.5か月分と目標には達していないが、半製品は目標の3か月にほぼ達しているので、6月からは社内での増産を目指している。人手不足の問題はあるが、労働基準法の範囲で残業で対応し、今までの1,000m<sup>3</sup>を1,300m<sup>3</sup>に上げていく目標。

柱材は対応できるが、土台が足りない。生産の上限は変わらないので、赤太の乾式注入の土台を増やして、柱を減らしてバランスをとってきた。

横架材は、米マツはある程度制限がある中で仕入れているが、足りない分はスギ横架材で対応してきた。

問題は、梁成アップには限界があるということ。

天井高が2,400mmから出るものに関しては今後どう対応していくのかまだ解決がみえていない。

非住宅物件もかなり受注しているので、国産材で全て対応できるのか、今からの問題提起になると思う。

これから増産して中長期的に安定的に出せるのかということについて、当社はH19年に国産材工場を建てたが、問題になってきたのが、100を挽いても全部が売れるわけではないということ。製材工場では、歩留まり上、貫材を必ずとっていかないといけないが、それが売れていかない。製材すると20%がトビクサレ等のハネ材で、それが安く販売せざるを得ない。増産しても比例して出てくるため、製材を増やすうえでの問題点である。

#### ○高田 座長

日本は、貫や垂木など、サイズがものすごく細かい。地域によっても違うが、小ロットに対応しなければならないのは大変ではないのか？

これが地域密着型の製材のいいところだと思うが、これからもそれでいいのか。

#### ○(株)山大 高橋 管理部長

日常的に住宅向けに共有化されているサイズの部材であれば、100製造したものを100販売できるが、貫材は需要がほとんどなくなっている。昔は土壁などぬり壁とかで使っており、規格も共有化されていたが、今は合板が使われているので、貫材の出口の絶対量が少なくなっており、供給量と需要がマッチしておらず、単価も安い。

#### ○高田 座長

今後、能代で日本最大の製材業者が東北に進出することも報道されている。

今のウッドショックという状況では、国外の問題を発端として、日本の現場が大きな影響を受けている。昨年はコロナ禍の影響を受け、その前には2008年のリーマンショックも経験した。

こういう状況に地域としてどう対応するのか、当事者の方が危機感を持っていると思うが、協議会を通じて、または普段の仕事を通じて、今までにない取組も行っていく必要があると

思う。林野庁からも協議会の場等で補助事業や支援策など情報提供いただければと思う。

先ほどから、人不足や、丸太で直接輸出しているという話もある。今回のテーマは外材の代替として国産材の部材をうまく供給しようということだが、やはり供給の大元である山から木が出てこないといけない。川上からいいたいことはないか。

#### ○秋田県素材生産流通協同組合 山田 理事長

人材不足については、材価が上がれば、従業員への賃金も上がるが、それだけではなく、仕事しやすい環境整備なども考えるべき局面にある。

山の伐採に対して世間一般からの理解も必要であることに加え、再生林も考えないといけない。植えるところまではできても、保育の人材育成をどうすればいいのか、今議論を盛んに行っている。

生産量を増やすには皆伐を増やせばいいという端的な考えもあるが、保育に回すべき人材をどうするのか、昨日の素流協総会でも話し合われた。人材確保が大きな問題になっている。

輸出については、今はウッドショックで原木が足りないといわれているが、2～3年前は木材の行き場がなくなって、それで輸出が始まったところ。

世界的な木材の流れに我々も組み込まれているということについて、今更ながら強く感じている。

#### ○高田 座長

川上から川下のいろいろな課題が共有できたが、大きな問題は人。中長期的に安定供給していくためには、増産、再生林、保育の人材育成が必要。

本日の議論を踏まえて、もう一度川下から発言いただきたい。

#### ○(一社)JBN・全国工務店協会 加藤 理事

川上、川中も大変苦勞されている。川下で利用する立場からは大変感謝。

我々も人手が足りない。大工の育成もいろんな形でやっているが若い人が少なくて苦勞している。

先ほど九州より東北のスギは強いという話があった。我々も山形県では県産木材の利用に対する補助制度もあるので、集成材を主として、住宅の方では横架材も含めて、構造計算もスパンを短くしたいと考えている。是非とも集成材を多く生産していただきたい。

#### ○(一社)日本木造住宅産業協会 東北支部 萩原 事務局長

今回は木住協の立場で参加しているが、住友林業という住宅メーカーの立場からいうと、日本林業の構造的な問題があると思う。国土の7割が森林であるにもかかわらず、このような事態となった。高度経済成長期時代に輸入材が台頭して、国内林業従事者が減ってしまった。最近では木材自給率も上がってきたが、そこにウッドショックがきた。一過性の需要に対しては設備投資ができない。設備投資をしても長期的に回収できる見込みもない。やはり人手不足。林業は30～40年かかる。伐採や保育のバランスがとりにくいのは、構造的な問題があるのではないか。

#### ○久慈プレカット事業協同組合 日當 専務理事

国産材の振興にプレカットも川中の一員として取り組んでいる。そういう流れが加速化している中、ウッドショックならぬウッドチャンスとしてみていくしかないと考えている。

遠藤座長ペーパーの短期的、中期的な取組はぜひ進めていってほしいが、プレカット業のような最前線にとっては、超短期の対応が必要になる。今でも場合によっては、材料がそろわず、客を選別しなければならず、苦しい状況。

瞬間的には量を増やしてもらっているのは大変よくわかった。しかしそれでも足りていないのが現実。それならどうしていくかといえば、着工を調整してもらえないのか。かつて震災の時に計画停電というのもあったが、着工を調整しながら、限られた供給を配分す



る。今は、いつ材が入るかわからない、いつ建てられるかわからないという不安感が増しているので、いつだったらできるということがわかれば前向きにとらえられていくのではないか。

#### ○高田 座長

それぞれの業界でスピード感が違う。リードタイムが違う。それで物の流れを合わせなければいけないのが長年の課題となっている。

当事者の皆様が動かなければ具体的な解決にはならない。今は短期的な対応が求められるが、100の要望に対し、30でも40でも応えていくというのが業界としての対応ではないか。

また中長期的には情報の共有により、サプライチェーンを見直すとか、人材の育成、産業構造の改善などそれぞれ関連するが、大きな戦略と小さな戦術を分けて考えていく必要。時には小さいワーキンググループを設置してすぐ対応していくとか、機動的な対応も必要。

外材リスクは顕在化したのが、国産材リスクがなくなったわけではない。供給が安定しないなど、なぜ外材にとってかわられたかという問題点、リスクが解消されたわけではない。これをウッドチャンスととらえるならば、国産材のリスク、地域材のリスクをもう一度捉えなおしていただいて、国産材のシェアを確立するのが大事。

#### ○林野庁木材産業課 田ノ上 課長補佐

労働力確保につながる支援事業について、参考資料（産業雇用安定助成金等）を紹介。

(以上)